

「今日まで そして 明日から」

明星学園 宮下 智

宮下さんの仕事は、「名探偵コナン」ですね。
そんな褒められ方をされて、とてもうれしかったのを覚えている。
もう、15年も前のことだ。
その頃の僕は、自分のめざすべき新しい着地点をようやく見つけて、歩き始めていた。
「わかってくれる人がいる…」
「名探偵コナン」
その言葉が、すっと心の中に落ちた。

新しい着地点。
それは、彼らの「本当の気持ちに出会う」、そのために、その専門性の獲得のために、この仕事をして行こう。
これが、新しい着地点。
語る術を持たないこの人たちの「本当の気持ちわかる」、それって、かっこ良くない？
それって、一生かけても、ちっとも惜しくない大きな仕事だよね。
心の中で何度もつぶやいてみた。

幼い我が息子に、我が娘に、
「お父さんの仕事ってなに？」と聞かれて、
「しゃべれない人の本当の気持ちをわかろうとする仕事なんだよ」と伝えることができることって、なんか最高に素敵な父親だ…
そんなことを考え始めていた頃だった。

「名探偵コナン」が真犯人を見つけるために、残された証拠を、ジグソーパズルの一片一片を合わせていくように、僕らは、彼らの「本当の気持ちに出会う」ために、彼らの一つ一つの行動を紡ぎ合わせていく。
確かに、ぼくらの仕事は、「名探偵コナン」だった。
この僕に、「名探偵コナン」の言葉をくれたその人は、まさかその言葉が、15年後の宮下を今でも支えているとは、思っていないだろう。
でも、その言葉は、僕の心の中で、永遠に不滅だ。
というわけで…
どこの誰とも知らない人に、僕は、今でも支えられている。
❖ ❖ ❖ ❖ ❖
宮下が、大好きだった活動グループがある。
自閉症の子どもたちとの遊びのグループだ。
そこで、10年、僕はボランティアとして、自閉症の子どもたちと週に一回、2時間、かけがいのない時間を過ごしている。
トランポリンをせがまれるままに、2時間跳び続けた。
せがまれるままに、2時間肩車をし続けたこともあった。
そんな時間が、大好きだった。

彼らは、僕の2時間トランポリンにも、2時間肩車にも、「ありがとう」のことはななかったが、僕は、いつでも「また、来週、遊ぼうね」と言って、別れた。

次の週、また笑顔で、そのグループにやってくる彼らの姿に、僕は、「ありがとう」の言葉を感じていた。そして、それが最高にうれしかった。

彼らは、「ありがとう」を言葉では、言わない（言えない）。

しかし、僕にとって何よりも救いだったのは、彼らが、批判めいたことを僕に言わない（言えない）ことだった。僕に対する評価は、遊びをせがまれるか、せがまれないか、当てにされるか、当てにされないかだけで、しかも、それは行動だけを通して、僕に伝えられた。

その場所、その時間での僕は、「あるがまま」でいられた。

評価も、批判も、何も気にすることなく、ただ自分を大切にすることだけで、その時間を過ごすことができた。それは、自閉症と言われている彼らから、プレゼントされた世界に一つしかない場所と時間だった。

自分に誠実であること、

それが、彼らから大切なプレゼントをもらえるたった一つの条件だった。

そんなわけで、彼らのやさしさと思いやりに支えられて、僕は、おかげで、20代を幸福に過ごしている。

一週間2時間のこの時間は、「自分の人生は自分で決めていいんだ」という自信を、僕に注ぎ込み続けてくれたのだった。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

今、僕らの手の中には、彼らの本当の気持ちを解くためのバイブル、『お心主義辞典』なるものがある。

そこには、例えば、こう書かれている。

〈急に高熱が出る〉

【体が動かない方、発語を持たない方の怒りの表現である。】

〈玄関にいる〉

【お母さんは、私のこと好きかしら、嫌いかしらと、頭の中が堂々巡りである。】

さて、世の中の、どれだけの人が、それを信じてくれるだろう。

〈自傷する〉

【自分は、悪い子だ、迷惑をかけている人間だ、自分のせいだ、というような否定的な感情の表現である】

〈下痢がある〉

【怒られて怖かった。あるいは、何か怒られるような気がする。】

〈しゃっくりをする〉

【胸につかえていることがある。言いたいことが言えない。】

もっとびっくりするようなことがらもある。

〈ひもを持っている〉

【母とのつながりが不安である。】

〈水洗の水を流している、流しの水を流している〉

【過去のイヤなことを忘れようとして（無いものにしようとして）、水に流している姿。】

〈親指の皮をむいている〉

【お父さんに伝えたいことがある。】

これら全部が、この15年の間に彼らに教えられた疑いもない真実だ。

『お心主義辞典』のインデックス一つひとつが、彼らの「本当の気持ちに出会う」ための、ジグソーパズルの切片なのだ。

僕らは、まず常識を捨てる。自分たちの常識は、彼らを仲間に入れて作った常識ではないから…。

そして、彼らを仲間に入れて、常識を作り直すのだ。

そうすれば、必ずわかる。

彼らの「行動全てが、何かを伝えようとしている発信である」ことが。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

「明日から、スカートをはこう、足が動かなくなつて、手が動かなくなつて、おしゃれなスカートをはいていいんだよ。職員みんなで応援するよ」

そんな職員の励ましに、「じてんしゃ…」と応えたKさんに、あなたはきちんとした返答ができるだろうか？

「じてんしゃ…ん？」では困るのだ。

それではKさんは幸福になれない。

「じてんしゃ…。そうだよ。明日から自分の力で、進んでいくんだよね。そうさ、自分らしくね。

お母さんの人生は、お母さんの人生、Kさんの人生はKさんだけの人生だものね。」

そう、自転車は、自立のイメージなのです。

だってほら、自転車が倒れないで進むためには、自分で一生懸命漕ぐしかないですから。

Aさんには「Aさん語辞典」、Bさんには「Bさん語辞典」…、僕らが英語の単語の意味が解らない時に、三省堂英和辞典を引くように、彼らにも、一人ずつ異なる「その人語辞典」が必要なのだ。

彼ら10人には、10冊の異なる「その人語辞典」が。

そうすれば、僕らも彼らも同じ星の住人になる。

「彼らと僕らが、この同じ星の住人になるために」

いつか きっと。

僕は、ここで宣言する。

心静かに…しかし、力強く！

決して大声で叫ぶわけでもなく、しかし、池に投げ込まれた小石が、どこまでも波紋を広げていくように…。

僕は決して止めない！

「本当の気持ちに出会う」そのための道を歩き続けることを！

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>